

# 孔彪碑と曹全碑の類似点に関する考察

上 小 倉 一 志

〔要旨〕 孔彪碑は漢碑の中ではあまり名前が知られていない石碑である。その理由としては文字の磨滅が激しく不鮮明である事と、文字の完成度が同時代の隸書碑と比較して未熟である点にある。しかし、その未完成な字形の中に漢碑の最高傑作である曹全碑と類似している部分を多数見ることが出来る。両碑の類似点を抽出し他の隸書碑とも比較検証をした。その結果、これらの類似点は同時代を代表する禮器碑や乙瑛碑とは異なる独自の結構法を有しており、孔彪碑が曹全碑より十四年早く書かれていることから、まるで孔彪碑の文字が曹全碑作者の未完成期の文字であるかのごとく感じられるほどである。さらに用筆法を比較しても両碑には共通するものがあり、この点においても同時代の石碑とは明らかに別の書風スタイルを持つていたことがわかる。

これらの類似点から安易に孔彪碑と曹全碑が同一作者の手によるものであると断定することはできない。しかし、少なくとも同一書風を学んだ者によると考えることは可能ではないか。漢代の隸書碑の中で美しさに異彩を放つ曹全碑がどのような過程を経て完成することが出来たかを明らかにする上で孔彪碑は重要な資料であると考ええる。

〈キーワード〉 孔彪碑・曹全碑・字形の類似点・用筆法の類似点





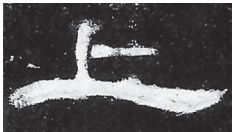







## はじめに

孔彪碑は建寧四年（一二七）年に刻された後漢の隸書碑である。孔彪とは孔子の子孫であり、孔宙碑で知られる孔宙とは兄弟である。孔彪碑が刻される七年前、延熹七年（一六四）年に刻された孔宙碑は漢碑の代表作として有名であり、隸書の結構法・用筆法から見てもかなり完成度の高い石碑である。それと比較した場合、孔彪碑はあまり周知されておらず後漢の隸書碑の中ではかなりマイナーな存在である。曲阜孔子廟の碑林に現存しているが、磨滅が激しく文字を確認できる部分が少ない事と、他の後漢隸書碑に比べ文字が未完成であることに起因していると考えられる。今回、この孔彪碑に着目したのは漢代隸書碑の最高傑作とされる曹全碑との結構法・用筆法における類似点にある。曹全碑は中平二年（一八五）年に刻されており、孔彪碑より十四年後の建立である。隸書の字形としてこれ以上ない美しさを呈している曹全碑の結構法に対して、孔彪碑の字形は全く未熟なものである。しかし、その未熟な字形の中に曹全碑の結構法につながる字形の要素を感じることが出来る。用筆法に関しても、曹全碑の筆法と同様のものを見ることが出来る。よって本研究では、孔彪碑と曹全碑の字形を比較し類似点をさぐるとともに、他の漢碑には無い用筆法に見られる共通点を分析し、両碑の関連性について考察を試みたものである。



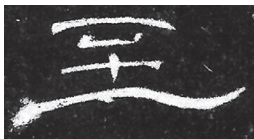









### 一 同一文字における字形の類似



孔彪碑と曹全碑の字形における類似を検証するため、同じ文字が刻されている八十二文字に関して比較した結果、明らかに字形の共通性を確認できたのは次の三十三文字である。

	曹 全 碑	孔 彪 碑
子		
郡		
君		
令		
張		
母		

	曹 全 碑	孔 彪 碑
廉		
直		
上		
除		
史		
歸		






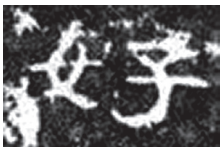

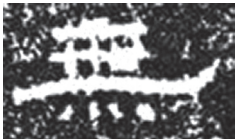



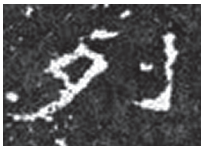
孔彪碑と曹全碑の類似点に関する考察（上小倉）

	曹 全 碑	孔 彪 碑
群		
至		
置		
前		
乃		
嶽		

	曹 全 碑	孔 彪 碑
下		
而		
事		
等		
義		
王		

孔彪碑と曹全碑の類似点に関する考察（上小倉）



	曹 全 碑	孔 彪 碑
民		
水		
好		
無		
居		
列		



完成度の高い曹全碑に比べ孔彪碑の結構法には未熟な部分が多くみられるが、点画の比率・バランスにおいてこれら三十文字には類似性がみられる。同時代の代表的八分隸である乙瑛碑（一五三）・禮器碑（二五六）・史晨碑（一六九）と比較しても孔彪碑と曹全碑に見ることができる他碑との特徴の違いがある。





「君」字横画に見られる波勢は乙瑛碑などには見ることが出来るが、孔彪碑・曹全碑では見ることが出来ない。波勢の有無に関しては「事」字の場合も乙瑛碑・禮器碑・史晨碑の横画には確認できるが、孔彪碑・曹全碑には見られない。

漢碑において「君」字は多くの場合正方形に近い字形であるが、曹全碑は左へ伸びる点画が極端に長く、それによって扁平な字形となっている。孔彪碑にも同様の特徴が見られ、横画に波勢が無く左へ伸びる点画で扁平に見せる字形は両碑に共通する特徴であるといえる。

左へ伸びる点画を極端に表現することによって扁平な字形を表現している文字として「乃」字を上げることが出来る。文字中央の空間を狭くすることによって、左へ伸びる点画を



	孔彪碑		孔彪碑		孔彪碑		孔彪碑
	曹全碑		曹全碑		曹全碑		曹全碑
	禮器碑		史晨碑		史晨碑		禮器碑
	史晨碑						

	孔彪碑
	曹全碑
	禮器碑
	乙瑛碑

より強調し扁平さを見せている。またこの空間の取り方は文字の重心を大きく右へ移動することとなり、禮器碑と比較してもその違いは明らかである。

「民」字の右下への波磔は孔彪碑・曹全碑ともに極端に伸びている。史晨碑に見られる波磔でも漢碑としては伸びやかな字形であり、他にこれほど伸びやかな字形を見ることは出来ない。

波磔を長く見せる表現は他の文字にも見られる。「無」字の波磔を孔彪碑・曹全碑のように長く表現している漢碑は他に見当たらない。「而」字も文字全体における波磔の割合が他の漢碑と比較しても大きいことがわかる。また、波磔以外の部分の字形も異なっており、「而」字に関しても孔彪碑と曹全碑は非常に類似しているといえる。これは「前」字にも



見ることが出来る。波磔に対する文字下部の割合が小さく、よって波磔をより強調することとなり、文字の扁平さを強く表現することとなっている。乙瑛碑・禮器碑と比較してもこのバランスの違いは明らかである。

「張」字弓部の字形に関しても最終画を左に大きく張り出す部分は、乙瑛碑に見ることの出来ない特徴であり、孔彪碑と曹全碑に共通する大きな部分となっている。

孔彪碑と曹全碑が他の代表的漢碑と字形を別にしてしている文字に「其」字がある。他の漢碑が金文に代表されるような古典的な字形であるのに対して、孔彪碑と曹全碑は楷書の字形と同様の近代的なものになっている。

今回、拓本の磨滅が進んでいることから、字形の類似している文字として取り上げなかつた中に「出」字がある。漢碑における「出」字は古隸的字形のものが多く、乙瑛碑・禮器碑・史晨碑を見ても字形が前漢の石門頌に近いことがわかる。

しかし、曹全碑の「出」字は古隸的字形に対して近代的とでも表現すべき字形をしている。楷書的でもあり、行書的な動きすら感じることが出来るような字形をしている。孔彪碑の

「出」字がこの曹全碑と同じ独自の字形をしているかは、厳密に比較することは困難であるが、動きを感じさせる横画や左右の縦画の方向を想像すると、かなり近い要素を持っていたのではなからうか。少なくとも漢碑の典型的な字形とは異なるものであったと考える。磨滅が激しく確認することが出来ないことが非常に残念な文字である。

これ以外の文字に関しても点画の配置・バランスに関して、孔彪碑と曹全碑の間には同様の作り方を見ることが出来る。全く別の石碑でありながら、これほど類似する文字を確認できることは他には類のない事であると考ええる。

## 二 部首・点画における部分的字形の類似

孔彪碑と曹全碑には同一文字の類似以外にも部首や点画の一部分にも共通点を見ることが出来る。これらの部分的類似も両碑の共通性を比較する上では非常に重要な要素である。



まず、阜部「こざと」・邑部「おおざと」の字形・筆法に関して比較したい。禮器碑・乙瑛碑の「こざと」は一画目が長く右方向へ伸び、左方向への深いく込みの途中から二画目が、明らかに別の点画として引かれている。これに対して孔彪碑・曹全碑の「こざと」は一画目の左方向へのくい込みが浅く、二画目へもそのまま点画が連続しているように見える。これは「おおざと」の場合も同様で、禮器碑・乙瑛碑の点画がしっかりとした形で引かれているのに対して、孔彪

		
孔彪碑	孔彪碑	孔彪碑
		
曹全碑	曹全碑	曹全碑
		
禮器碑	禮器碑	禮器碑
		
史晨碑	史晨碑	乙瑛碑

るような一画目終筆部を強く止める筆法の場合が多く、孔彪碑・曹全碑のように引き抜く終筆のものはあまり見ることが出来ない。

これら部首や点画の一部分に見ることが出来る孔彪碑と曹全碑の共通点は、同時期の漢碑の特徴とも異なるものであり、両碑の関係を探る上で重要な類似点と言える。

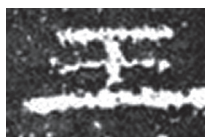
碑・曹全碑は連続する点画のような表現となっている。

次に「者」「考」「孝」字などの三画目横画と四画目斜画との関係をみる。禮器碑・乙瑛碑はともに横画と斜画がたすき掛けのような形になっている。このような形の漢碑は多いが、孔彪碑・曹全碑は水平な横画に対して斜画が交差している形となっている。

「中」字三画目横画部分が一直線に引かれていることも孔彪碑・曹全碑には共通しており、禮器碑・史晨碑が左右に分離している事とは別様式の字形となっている。

「食」字一画目の終筆部分の結構法・用筆法に関しても孔彪碑・曹全碑は他の漢碑とは異なるものとなっている。禮器碑・史晨碑は終筆部分を強く左へ押し当てるように止めているのに対して、孔彪碑・曹全碑は終筆部分を非常に穏やかな筆法で抜いている。漢碑においては禮器碑・史晨碑に見られ

### 三 用筆法における共通点



孔彪碑



曹全碑



禮器碑



乙瑛碑



曹全碑



禮器碑



乙瑛碑

孔彪碑と曹全碑の類似点に関する考察（上小倉）

漢碑の中で最も美しい字形であるといわれる曹全碑は、その用筆法においても独特の穏やかさや優しさを呈している。その作者は女性ではなかったかとされていられるのも、この用筆法から感じられるところが大きく影響しているだろう。

曹全碑の横画は起筆においては忠実な逆入からの藏鋒を守っており、均一の太さで引かれた横画は終筆に至るまで確実な中鋒の線質を保っている。孔彪碑も字

形的には曹全碑に比べ全く未熟ではあるが、起筆における藏鋒、あるいは終筆に至るまでの中鋒の線質においては曹全碑同様の忠実な筆法を感じることが出来る。禮器碑は起筆は同様の藏鋒ではあるが、横画には随所で抑揚のある線質となっており、孔彪碑・曹全碑の横画の線質とは異なるものとなっている。また乙瑛碑を見た場合、その横画起筆には筆を打ち込むときの力強さがあり、曹全碑のような忠実で丁寧な逆入からの藏鋒とはなっていない。さらに横画の用筆法も起筆から終筆まで完全な中鋒を保っているわけではなく、側筆的な運筆を感じさせる部分もある。このように横画の用筆法を見た場合、孔彪碑



#### 孔彪碑と曹全碑の類似点に関する考察（上小倉）

は曹全碑に最も近い筆法で書かれていることがわかる。

波磔においても孔彪碑は曹全碑的な筆法を用いている。この二碑の波磔は起筆から中鋒を守りつつ運筆し、波磔終筆部分においても中鋒を保ちながら筆を払う形の波法である。これに対し、禮器碑・乙瑛碑の波磔終筆部分では中鋒ではなく側筆の筆法を用いて波磔の強さ・鋭さを強調している。史晨碑の場合も禮器碑・乙瑛碑ほどではないが波磔終筆部分を強調しようとする意図からか、やや側筆の筆法となっており素直に中鋒のまま引き抜いている孔彪碑・曹全碑の筆法とは異なるものとなっている。孔彪碑が刻される七年前（一六四）に建立されている孔宙碑は横画の筆法などは、孔彪碑や曹全碑に通じるところがあるが、波磔終筆部分には重さがあり曹全碑のような素直な用筆法とは異なるものであると考える。

これら用筆法においても孔彪碑と曹全碑には類似点が見られ、全く別の石碑でありながら用筆法がこれほど共通しているものも他の漢碑には見ることはできない。

#### 四 孔彪碑と曹全碑の関連性

このように孔彪碑と曹全碑を比較した場合、字形においては三十文字の類似するものを確認することができた。その類似点を同時代の代表的な隸書碑と比較した場合に全く異なる特徴も示していた。また、用筆法を比較した場合も横画の運筆、波磔の運筆などにおいて孔彪碑と曹全碑には共通する部分が見られ、両碑が用筆法の根幹において非常に近いことを確認することが出来た。文字の完成度は曹全碑が格段に高いレベルである事は言うまでもないが、孔彪碑を書いた人物が曹全碑を書いた人物と同一人物であると仮定した場合、孔彪碑が曹全碑より十四年前の建立であることから考えると、その字形の未熟さはある程度想像することが出来る範囲であろう。



さらに両碑の建立された地域を見ると、孔彪碑は曲阜に建立され、曹全碑は陝西省郃陽県東部で出土していることからその地域で建立されたものと考えられる。この二つの地域は同じ場所とは言えないが、隣接する地域でもあり曲阜から見た場合、曹全碑が出土した地域は当時の都のある方角で全くかけ離れた位置関係ではないことから、地域的に見た場合も両碑が同一の人物の手によるものと考えられることは不可能ではない。

これらの字形の類似、用筆法の類似、地域的隣接、揮毫時期の違いによる字形の差などから、孔彪碑と曹全碑が同一人物によって手がけられたと仮定することは可能である。だがそれを確定するほどの条件を現状では満たしていない。しかし、たとえ同一人物の手ではないにしても、これほどの共通点がある事からこの二碑は同時代に同じ書風を学んだ人物の手によるものと考えられることは出来ないかと考える。漢代で最も美しく完成度の高い隸書碑とされている曹全碑が、どのような変化を経てあのような姿になったか、その書風が完成して行く過程及び作者を知る上で、孔彪碑は非常に重要な資料であると思われる。

#### 参考文献

- ・ 中国法書選 8 「曹全碑」 二玄社
- ・ 「」
- ・ 5 「礼器碑」 「」
- ・ 「」
- ・ 6 「史晨前碑・史晨後碑」 「」
- ・ 「」
- ・ 4 「乙瑛碑」 「」
- ・ 書跡名品叢刊 11 「孔宙碑」 「」

An Examination of Similarities between the Kōhyōhi Stele and Sōzenpi Stele

Hitoshi KAMIKOKURA

Abstract

The Kōhyōhi stele is not an especially well known one from the Chinese Han Dynasty. This is because the characters engraved on its surface are unclear due to abrasion and because they are not as refined as ones seen on other contemporary “scribe style” (reisho) steles. However, these unrefined characters have many similarities with those on the Sōzenpi stele, which is a masterwork among ones from the period. This paper examines their similarities and compares them with scribe-style characters on other stele. It demonstrates that the characters on them differ from representative ones from the same period such as those found on the Raikihi and Itsueihi steles, and the characters on the Kōhyōhi stele appear to be less refined versions of the ones the calligrapher wrote on the Sōzenpi stele, because the Kōhyōhi stele was engraved 14 years earlier than the Sōzenpi stele. In addition, these two steles have similarities in their brush techniques, which means that they had styles different from other contemporary ones.

Although these similarities do not lead directly to the conclusion that the Kōhyōhi and the Sōzenpi steles were created by the same calligrapher, it is possible that they were created by the calligraphers who at least learned the same writing style. In that sense, the Kōhyōhi stele is significant for understanding the perfection of the Sōzenpi stele, which shows distinctive beauty among scribe-style steles in the Han Dynasty.

Keywords : Kōhyōhi; Sōzenpi; similarities of character shapes; similarities of brush techniques